水の誘惑

釣魚文学大全　水の誘惑

昭和五十四年十二月十五日　第一刷発行

定価　一二五〇円

編者　開高　健

発行者　葛西良員

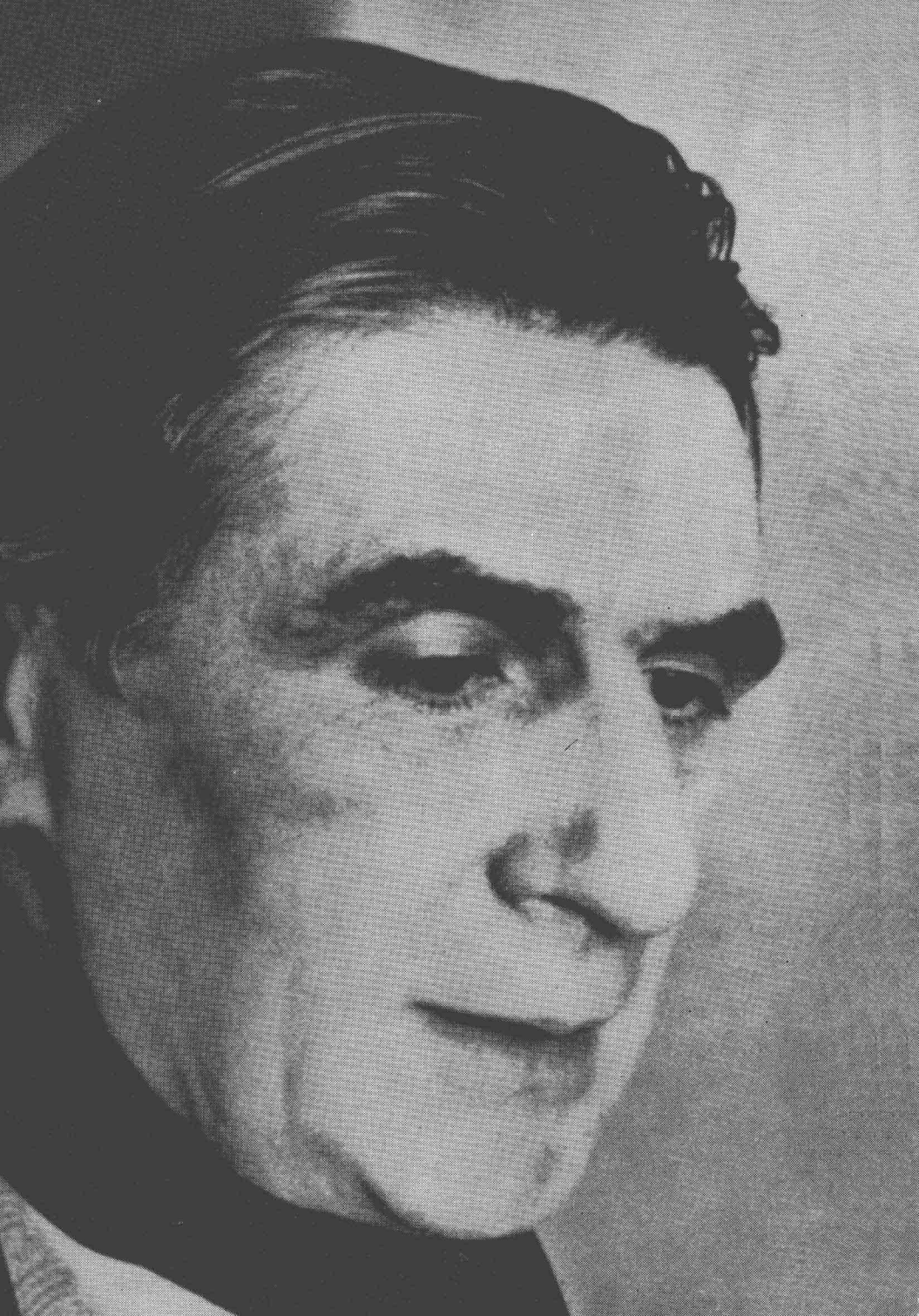
発行所　株式会社　青銅社

東京都文京区白山三丁目一番十四号白山ビル
電話(八一五)九七八六振替東京一一七六七九

印刷　大明印刷
製本　大口製本

万一乱丁落丁がありましたらお取替え致します

©1979　Printed in Japan



目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I 青い海で

林房雄 012 釣人物語（抄） 房総の鯛のドンブリ釣法

ヘミングウェイ 039 スペインの鮪釣り／青い海で メキシコ湾流でマーリンを追う

山本周五郎 051 対話（砂について） 月夜に魚を〝踏む〟

佐藤惣之助 055 海へ下る／時間の形式 〈詩〉

梅崎春生 059 突堤にて 戦時下の釣り人たち

広津和郎 068 グチ釣 夜の海の投げ釣り

幸田露伴 075 幻談 江戸のケイヅ鯛釣り

Ⅱ 池畔に釣る

レディック 096 湖の女王マ・キイ（抄） 巨大なマスケランジとの死闘

坪田譲治 105 池畔に釣る 鮎と鯉とアラビヤ夜話

アルテンベルヒ 111 釣 釣りの美と残酷

Ⅲ 源流へ

ヘミングウェイ 114 二心ある大川 ひとりキャンプをはり鱒を釣る

田木繁 135 釣人一／釣人二／魚信 〈詩〉
モーパッサン 138 あな／二人の友 モロコと川沙魚と釣り師の執念
林房雄 156 妖魚 熱帯の川に幻の巨魚を追う
尾崎一雄 177 岩魚はのびる 文士の釣り行
ウィリアムスン 186 鮭サラの一生（抄） 毛鉤に躍る鮭
緒方昇 196 寒江雨釣／人生至楽 〈詩〉
獅子文六 199 将軍鮒を釣らず 将軍が初めて釣竿を手にした時
坂口安吾 214 釣り師の心境 鮎かメダカか？

チェーホフ　221　かわめんたい　半日間の手づかみの苦闘

伊藤桂一　227　源流へ（抄）　岩魚とともに源流へ溯る

著者一覧　250

釣魚文学大全

水の誘惑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

青い海で

釣人物語（抄）

林　房　雄

ディーゼル・カーは魚の匂いがした。

魚がつんであるわけではなく、乗っているのが土地の漁師とおかみさんばかりというわけでもないのだが、釣りたての魚のはだのような健康な海の香りがせまい座席にただよっていた。

これは白井さんの感傷的な錯覚かもしれなかった。だが、それでもかまわない。旅行とは未知の風景と風俗の上に浮かんでは消える錯覚を楽しむ遊びなのだ。

館山の駅をすぎると、海が見えなくなった。列車は半島を横断しているらしい。線路の両がわに、手入れの行きとどいた花と野菜の畑が季節はずれのみずみずしい色彩をひろげていた。ここは関東の温室なのだ。冬を知らない花が咲いている。

再び海が見えはじめるまでには、三十分ほどかかった。外房の海だ。同じような岬と入江がつづき、同じような小さな村と駅があった。村々の屋根と砂浜と波の形に見おぼえがあるような気がした。

そうだ、大正初期の油絵だ。そのころの若い画家たちにとっては、外房州は南フランスだった。黒のつば広帽子とボヘミアン・ネクタイの画家たちが絵具箱をかついで、黒潮の香のする風と太陽の中をあるきまわった。どの村の宿屋に行っても、柱と壁に油絵具のあとがついていたという

伝説がある。……

日が暮れはじめた。列車はゆっくりと進んで行く。けっしていそがない。単線だから、交換のために五分間以上停車することもある。

白井さんもいそがなかった。どこまで行く列車なのか、車掌に聞けばわかることだが、それも聞かなかった。

腹がへってきた。勝浦という駅まで来たとき、白井さんはやっと腰をあげた。ここらでよかろう。

もう夜だ。改札口にタクシーが二台だけならんでいた。白井さんはその一台にころげこんで、釣に来たのだが、どこか適当な釣宿につれて行ってくれと頼んだ。

運転手が言った。

「旦那、いい時においでになりましたな。この二三日、タイがさかんに上がっていますよ」

駅前にはネオンが光っていた。このあたりでは大都会らしい。だが、タクシーは三分と走らぬうちに、町はずれに出て、「望洋館」という名前だけは大きい、小さな旅館の玄関についた。

バラック同様の安宿だったが、その玄関先に、ばかでかいキャデラックがでんとすわっていた。

白井さんは、あっと思った。その派手な車に見おぼえがある。

鎌倉でも見かけたことのある利光剛造氏の車だ。こんなところまで、キャデラックを乗りつけてくるのは、いかにも利光氏らしい。

「それもいいだろう」白井さんは自分に言ってきかせた。「利光氏は変物にはちがいないが、釣師としては愛すべき老人だ。房州の果てまでキャデラックを乗りつける非常識な熱中ぶりを、むしろ愛嬌として買ってやるべきだろう。釣の道では大先輩なのだ。房州のタイの名所に彼が先まわりしていたとしても、ふしぎではないし、こっちは彼に借金があるわけではないのだから、こわがることもない」

幸いに部屋はあいていた。廊下はきしみ声を立て、すこし便所のにおいもする、万事お粗末な宿屋であったが、一食つき八百円から千円がきまりの釣宿ではぜいたくは禁物だ。利光氏のような大釣師が車を乗りつけるところを見れば、歴史もあり、船頭のいいのもそろっている優秀な釣宿にちがいない。

女中に案内されて、白井さんは廊下のはずれの小部屋に通った。そして、もう一度、あっとおどろいた。
床の間に、化物みたいな大ダイの魚拓がかかっていた。六尺の壁面からはみ出しそうな大魚拓だ。十二・八キロと書いてある。
白井さんの書斎には八・八キロのタイの魚拓があり、東京湾の鴨居沖で昭和十五年に釣上げたことになっているが、これは実は、雇った船の船頭の獲物だ。白井さん自身の最高レコードは三キロで、東京湾と相模湾からはじめて、瀬戸内海、天草、壱岐の島まで釣りまわったが、このレコードは自分では破れなかった。四キロ前後のタイなら、人の釣ったのにときどきお目にかかっているが、十二・八キロというのは、ただ化物というよりほかはない。
「すごいもんだね！」
「はい」頬っぺたの赤い女中は表情もかえずに答えた。
「今日も、五キロ近いのをかしらに十二枚あげたお客さまがございます」
「じょ、じょうだんじゃないぜ！」
大ダイは三日狙って一枚か二枚、あぶれる日のほうが多いことが釣師の常識になっている。
「はい、じょうだんではございません」女中はあたりまえのことのように言った。「いっしょにお出になったお嬢さんも三枚あげました。鎌倉の利光さんというお客さんです」
やっぱり利光剛造氏だった。お嬢さんというのは、久里浜行の横須賀線の中で会ったマコという例の美少女のことだろう。
だが、白井さんはそんなことよりも、五キロ近いのをかしらに十二枚という利光氏の獲物の数に胆をうばわれた。マコというあの少女まで三枚あげたという。もっとおどろいたのは、この勝浦の釣船は便乗制で、船頭の釣った分は船頭のものになるのだが、今日の船頭は客の二倍以上釣って、市場におろしたという。昔は知らず、今の釣師の常識では、天文学的大漁だ。
そう言えば、ここにくる途中に、小湊（こみなと）という駅があった。日蓮宗の何とかいう寺と鯛の浦というタイの名所があるので有名な港町だ。白井さんもその名だけは知っている。鯛の浦は宗教的な禁漁区になっていて、伊勢大神宮の五十鈴（いすず）

川のアユのように、人が手をたたくと、すごい大ダイの群が船べりに集まってくるという話も聞いている。

その禁漁区で繁殖し成長した魚が泳ぎ出てくるとすれば、このあたり一帯の海がタイの宝庫になり、十二・八キロの怪物がたまには釣れても、別にふしぎではない。日並みと潮にめぐまれれば、利光剛造氏の大釣も珍しくないということになるのだろう。

「利光さんはどうしている。よろこんでいるだろうな」

「はあ、沖からおあがりになって、すぐにおやすみになりました」若い女中は答えた。「今日で三日目ですから、くたびれたんでしょ。いくらたくさん釣っても、うれしそうな顔をしないお客さんです」

「そうだろう。そんな老人だ」

「あら、お知合いですか」

「ぼくも鎌倉だよ。……さあ、早く飯にしてもらうかな。大漁の話を聞いたとたんに腹がへったよ」

「はい。その前に、お風呂をどうぞ」

風呂は長州風呂だった。鉄の大釜の中にはいるのだから、石川五右衛門みたいだときらう人もあるが、九州の田舎育ちの白井さんには、これもなつかしい。

尻を焼きそうに熱かったのを適当にうめて、首までひたり、うすぐらい天井にただよう湯気をのんびりと楽しんだ。

部屋にかえってみると、夕食の支度ができていた。刺身はカンパチ、塩焼はセイゴ、煮付はメバル。どれも沖から上がったばかりの魚だ。黒潮と磯の香りがした。ところによっては、釣宿のくせに、黒ずんだマグロの刺身に冷凍のエビのフライ、カマボコの吸物などという無神経なのがいまだにあるが、この「望洋館」はそんな釣宿ではないらしい。

白井さんは一本がきまりの晩酌を、もう一本追加して、利光氏の大漁とタイの宝庫にまよいこんだ自分の幸運を祝った。

食事が終わったころ、廊下に足音がして、ふすまの外で荒っぽい男の声がした。

「ごめんなさい。おじゃまします」

血色のいい、丸々とふとった、中年の男がはいってきて、宿の主人ですと名乗った。みごとに禿げ上がった額がみがいたように光っている。すこしくたびれた大島がすりに角

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com